京都域粋５９号　『 和宮降嫁 』

2006/02/28

モリソン号事件

天保八年(1837)七月二十九日

米国商船**モリソン号**が江戸湾に入ろうとしたところ、沿岸警備隊より威嚇砲撃を受けました。異国船ならば理由の如何を問わず直ちに追い払えという、「異国船打払令」に基く攘夷行動です。この後、同船は鹿児島へ回りましたが、同じ目に遭い、やむなく中国マカオへ帰港しました。

同船には**尾張国知多出身の日本人３名(岩吉･久吉･音吉)**――５年前に船が遭難し米国西海岸に漂着――も乗っていました。数奇な運命で、アメリカ→ロンドン→中国のマカオへと移送され、ついに本国送還の日を迎えたのですが、かくて祖国への帰還は叶わなかったわけです。

知多半島の美浜町――昨年２月には南知多町との合併案が否決されて、南セントレア市という候補名も実現しなかった――の若宮八幡宮前には、「岩吉久吉音吉頌徳記念碑」が建っています。彼らはマカオでドイツ人宣教師ギュツラフに協力し、日本語訳の聖書を作るという大きな貢献を果たします。その功績で日本聖書協会が碑を建立したわけですが、並みの人生ではないですね。漂流民と言えば、**大黒屋光太夫・高田屋嘉兵衛・中浜(ジョン)万次郎・ジョセフ=ヒコ**などの名が特に有名ですが、知多出身の３名もぜひ記憶に留めたいところです。漂流民は意図せざる運命に巻き込まれましたが、異国と交わり、日本開国の礎(いしづえ)になったと言えるでしょう。

公武合体

ご存知のように、「鎖国」とは全く閉鎖をしたのではありません。**中国・オランダ**には交易を、**琉球・朝鮮**には交信を許したわけで、ごく限られた国だけが特別扱いであったのです。そのため、オランダの東アジアにおける利権を奪取しようとしたイギリスや、太平洋航路を開拓して中国進出を図ろうとしたアメリカなどは、日本への接触が遅れた分だけ、武威を示して開国を迫ることになったと言われます。

徳川幕府は祖法(鎖国政策)を守ろうとしましたが、「異国船打払令」も役に立ちませんでした。ペリー来航以降の幕府の狼狽ぶりとか対応のまずさは、かえって攘夷運動に火をつけてしまい、また、**天保大飢饉**の影響で**農民一揆**や**打ちこわし**が続発、幕府は内憂外患を抱えた状態でした。朝廷からも攘夷決行を迫られた幕府は、窮余の策として、朝廷の威光を借り難局を打開しようと考えたわけです。それが世に言う**「公武合体」**と呼ばれるものでした。

古今東西、対立している者同志が婚姻を仲立ちに宥和を図ることは多くの例があるようです。有名なケースでは、クレオパトラ７世〔エジプト〕とカエサル〔ローマ帝国〕が思い出されます。

後のない幕府が練った秘策も、仁孝天皇皇女の和宮(かずのみや)と十四代将軍家茂(いえもち)との婚儀でした。朝廷との間で仲直りを演出し、尊王攘夷運動を始めとする批判を空洞化させようとの魂胆です。ところで、朝廷と幕府との婚儀というものは和宮が初めてではなく、下記の前例がありました。

後水尾天皇と二代将軍秀忠の娘･和子との縁談‥‥めでたくまとまる。

霊元天皇皇女八十宮(やそ)と七代将軍家継との婚約‥‥但し、婚約のみで終わる。

紀伊藩主徳川慶福(よしとみ)と伏見宮貞教親王の妹･則子女王との縁談‥‥後に、慶福が宗家を継いで十四代将軍･家茂となったため、これも立ち消えとなった。

家茂は紀州藩主時代も含め二度目のことだったのですね。幕府としては八十宮と家継の前例を引き合いに出して、「公武一和」を申し出たわけです。和宮も家茂も同じく１３歳の時です。

京都域粋５９号　『 和宮降嫁 』

2006/02/28

和宮親子内親王

（かずのみやちかこ　ないしんのう）

仁孝天皇の第八皇女で、**孝明天皇**は異腹の兄。

現代でも結婚に際しては家の格が話題になるようですが、当時、ましてや天皇家・将軍家ともなれば国政の一大事です。天皇家は、血統の純粋性を保つために４親等もしくは５親等以内での婚姻しか認められない決まりでしたから、それ以外の場合には天皇の許可を必要としたのです。

和宮の場合、生まれる数ヵ月前に父･仁孝天皇が崩御されたので、孝明天皇が継承をしました。つまり和宮は、生まれながらにして人生そのものを兄・孝明天皇に委ねる形になったわけです。

尚、和宮には一つ大きな問題があり、それは、５歳の時に有栖川宮熾仁（たるひと）親王と婚約済みだったことです。従って、降嫁の前に婚約解消という課題が生じたのです。

朝廷と幕府は皇女降嫁問題で交渉しますが、双方の狙いと言い分は下記のようなものです。

	幕　府	朝　廷
狙い	朝廷の権威を利用して国内を鎮静化する。 諸外国との交渉も幕府主導で臨みたい。	幕府からの申し出を最大限に利用したい。 この機に乗じて、国政の大権を奪取する。
主張	公武一和により攘夷行動も鎮まり、民衆も安堵する。諸外国に対しても強い一体感を示すことができ、和宮降嫁は必要不可欠で早く実現させるべきである。	熾仁親王との婚約を安易に解消できない。 和宮は先帝の子で、異腹の妹宮でもあり、天皇の思うままにはできない。和宮自身も外国人の往来する関東を怖がっている。

両者の主張には隔たりが大きく、実質は主導権争いであり、“同床異夢”の関係にありました。体の良い政争の道具にされた和宮は人質のような存在でしたから、まことにお気の毒です。

さて、家茂の夫人候補には３名の名――敏宮（ときのみや）(和宮の姉)、和宮、富貴宮（ふきのみや）(孝明天皇皇女)――が挙がりました。しかしながら、敏宮は既に３０歳であり１３歳の将軍には相応しくないとして、また富貴宮は誕生間もない嬰児だとして、家茂と同年の和宮が最も相応しいと目されました。

ところで、和宮には７人の姉宮が居られたのですが、不幸にして敏宮を除いて他は夭折されておられます。また敏宮にしても、婚約者が亡くなられたために独身でおられたという次第です。さらに言えば、富貴宮は翌年に薨去されたことから、ますます和宮が焦点になっていくのです。余談ながら、兄宮についても７人おられましたが、成人に達したのは孝明天皇一人だけです。

しばらくすると、幕府はやや恫喝気味に詰め寄り、朝廷は一つの条件を示しました。

幕　府	朝　廷
公武一和が叶わなければ攘夷は難しい。 絶対に諸外国との争いが起きないとは、保証ができない。それでも宜しいか？	和宮の降嫁が真に公武一和のためであれば、全く不承知でもない。但し、和宮は外国人を怖れており、勧めることも難しい。それ故、外国との通交を拒絶し、せめて嘉永初年頃の情勢に戻すなら説得も可能である。

朝廷の言い分は、ペリーが来航する前のような情勢にしてくれれば、和宮も安堵するはずで、そうなれば説得も惜しまない、ということです。つまり、攘夷が先決という条件付き回答です。未だに両者の言い分はちぐはぐしていますが、幕府の対応如何では合意の可能性が生れました。しかし、攘夷など簡単にできないことは双方分かっているわけで、虚々実々の駆け引きです。

京都域粋５９号　『 和宮降嫁 』

2006/02/28

和宮降嫁で終わらず・・・・

最終的に決着がついたのは、下記のような幕府からの誓約が出たためでした。

「降嫁が実現すれば、７～８年ないし１０年の後には、必ず外国と交わした条約を破棄するか、あるいは武力攘夷を実行する。」

幕府は思い切った返答をしましたが、７～１０年という期限はどこにも裏付けは無いのです。一方の朝廷では、幕府から「攘夷を約束する」という言質を取り付ければ、それで十分でした。

文久元年(1861)十月、和宮は京都を発して江戸へと下向しました。そして翌年の二月十一日、江戸城において家茂との婚儀が執り行われます。この時、家茂・和宮はともに１６歳でした。

余談ながら、江戸への東下の旅は東海道ではなく中山道が使われています。その理由ですが、直前にオランダ商館付きのヒュースケンス暗殺が起き、降嫁を喜ばない暴徒も出現し、さらには道中の河川が前年に水害となるなどの事件や事故を憂慮したためです。空前絶後の規模となった和宮一行の行列――朝廷と幕府双方による随行員・人夫の員数は合計約２万６千人、列の長さは最後尾まで約５０キロ――が馬籠宿を通る様子が、**島崎藤村の小説『夜明け前』**にも登場します。また、**有吉佐和子の小説『和宮様御留』**では、江戸に入った女性は和宮とは別人で、道中の途中ですり替えられたとする替え玉説を展開しています。それほどに不穏な空気があったわけです。

上の誓約は幕府にとってはまさに自縄自縛（じじょうじばく）でした。朝廷から幕府への要求は強まる一方で、表現には少し問題がありそうですが、“いじめ”に近いような出来事が起きています。この時期、将軍家茂直筆の誓書が朝廷(天皇)宛に出されていますが、こんなことは史上初めてのことです。その上、天皇に直接誓約せよと督促される形で京都上洛(文久３年３月･1863)が決まりました。

三代家光以来２３０年振りという将軍上洛は針のむしろに座るようなものでした。翌四月には攘夷祈願のための石清水八幡宮行幸が意図的に行なわれ、家茂などは風邪を理由に随行を避けたほどです。また、将軍代行を務めた慶喜は社頭にて「攘夷の節刀」を授かる役目でしたが、直前になって腹痛を理由に山下の寺に引っ込む始末で、朝廷からは笑い者にされました。揚句の果て、**「幕府は、五月十日をもって攘夷を開始する」**と返答しますが、空約束に他なりません。

それ以降の幕府の運命は、皆様ご存知の通りですが、和宮降嫁に関った将軍家茂も孝明天皇も慶応二年(1866)に相次いで亡くなりました。家茂２１歳、孝明３６歳ですから二人ともに若い。和宮と家茂の結婚生活は４年半と短く、しかも家茂は京都上洛や２度にわたる長州征伐のためにそのうちの３年間は江戸を留守にしております。決して幸福であったとは言えないでしょう。

これも余談ながら、例の熾仁親王ですが、戊辰戦争の際には東征大総督になって江戸城接収を果たしておりますね。元の婚約者の嫁ぎ先を完全に崩壊させたわけで、実に因果なことです。

最後に、和宮の残した言葉と歌を紹介しますが、何とも痛ましい心情が感じられます。

「天下泰平の為め、誠にいやいやの事、余儀なく御うけ申し上げ候事におはしまし候」

「住み馴れし　都路出でて　けふ(今日)いく日　いそぐもつらき　東路のたび」

「惜しまじな　君と民の　ためならば　身は武蔵野の　露と消ゆとも」